

正誤表・更新情報

本書中に訂正・更新箇所等がございました。お手数をお掛けしますが、下記ご参照頂けますようお願い申し上げます（2015年4月2日）

■第1版 第2刷(2011年11月15日発行), 第3刷(2012年10月15日発行)の修正・更新箇所

※第1刷からの修正箇所はhttp://www.yodosha.co.jp/correction/9784758112352_corrections.pdf をご参照ください

頁	場所	修正前	修正後	補足	掲載
第4章 炎症性腸疾患の内科的治療					
88	図1説明文	文献1より引用.	文献1より引用. なお, 平成24年度版はhttp://www.jimro.co.jp/ibd/index_ibd.htmで参照することができる(2015年3月1日補足)		15/04/02
97	表2説明文	文献3から引用.	文献3から引用. なお, 平成24年度版はhttp://www.jimro.co.jp/ibd/index_ibd.htmで参照することができる(2015年3月1日補足)		15/04/02
128	point欄の前		※1の記述を追加		15/04/02
130	表1「消化態栄養剤」の「成分」の2行目	2~3 ペプチド 60%	ジ・トリ ペプチド 60%		13/02/07
130	表1「消化態栄養剤」の「成分」の5行目	トリカプリリン 50% サフラワー油 50%	トリカプリリン 70% サフラワー油 16%		13/02/07
130	表1「消化態栄養剤」の「1剤あたりの内容」の5行目	58.4	58.7		13/02/07
索引					
209	右段11行目	アダリムマブ……197	アダリムマブ…… 128 , 197		15/04/02
211	中段12行目		ヒュミラ®……128	1行追加	15/04/02

3 補足：アダリムマブ（ヒュミラ[®]）について

インフリキシマブは一部にマウスの蛋白配列を有するキメラ抗体であるためインフリキシマブ自体に対する抗体産生が生じ投与時反応がおこることがある。これに対しアダリムマブはその蛋白配列が完全ヒト型の抗TNF α 抗体として開発された。アダリムマブは自己注射可能な注射シリンジタイプ（1本40mg）の皮下注射製剤であり、初回投与160mg、2週後80mg、4週後40mg投与し、その後隔週40mgの維持投与へと移行する。インフリキシマブとアダリムマブの有効性についてはほぼ同等と考えられており、その使い分けは患者の生活スタイルやアドヒアランスなどによって選択されるべきと考えられている。インフリキシマブに対する投与時反応が強い症例ではアダリムマブへの変更が有効なことがある。抗TNF α 抗体製剤としてのアダリムマブの副作用や使用上の注意事項はインフリキシマブと同じであるが、皮下注射製剤特有の投与部位反応（注射部位の痛み、硬結、発赤、腫脹など）が出現することがあり、特に開始1カ月以内に発生することが多いとされている。2015年3月の時点でクローン病、潰瘍性大腸炎、腸管ペーチェット病に対して承認されている。

【アダリムマブの炎症性腸疾患に対する承認状況】

クローン病に対する寛解導入および維持投与の承認（2010年）。

潰瘍性大腸炎に対する寛解導入および維持投与が承認（2013年）。

腸管ペーチェット病に対する寛解導入および維持投与が承認（2013年）。

【参考となる文献】

- クローン病

Hanauer, S. B. et al. : Gastroenterology, 130 : 323-333 ; quiz 591, 2006.

Colombel, J. F. et al. : Gastroenterology, 132 : 52-65, 2007.

- 潰瘍性大腸炎

Reinisch, W. et al. : Gut, 60 : 780-787, 2011.

Sandborn, W. J. et al. : Gastroenterology, 142 : 257-265, 2012.

- 腸管ペーチェット病

Tanida, S. et al. : Clin Gastroenterol Hepatol, 2014 Sep 19.pii: S1542-3565(14)01351-2. doi: 10.1016